

## 第二十一章 奉天の朝

開けない夜はないと言うが、あれだけ騒がしかった奉天の夜も、何事もなかったかのように普通に夜明けはやってきた。

前日、奉天城で幽霊大浴場に入ってしまったかおり姫とマルさんは、前夜は一睡もできず部屋で凍り付いていた。

送料無料、六回払いで期間限定プレゼントの吸血鬼よけ十字架ネックレスもついた雑誌ムーの通販で買った魔よけの数珠もまるで効果がないように思えた。

「マル。あなたとこの雑誌、ホンマに霊験確かめて紹介してんの？」

「そんなん、知らんがなあ。広告主の責任やでえ。」

「ホンマに水晶かいな。ガラス玉やないの？」

「知らんがなあ。ほんま、知らんがなあ。」

ホテルのロビーでは帰依住職の朝のお勤めが始まっていた。

「あたしです。下で和尚様の読経が始まってます。行ってみたらどないでっしゃろ！」

満湖が知らせに来てくれると、二人は部屋を飛び出てロビーに向かった。

帰依住職も突然の申し出にいささか戸惑ったが、ここで断つては女がすたるので、阿弥陀様におすがりすることにしたのだが、獄門島での一件があるので読経しながら薄目を開けて足首が歩いていないか？注意した。

かおり姫とマルさんがロビーで帰依住職に読経してもらっているとき、もう一つの思惑がうごめいていた。陸軍地理測量部である。かおり姫たちが持っているロマノフ王朝の隠し財産の地図を狙っていた。

「秘密の地図を奪取せよ！」

オタクグループに埋没している安德君を除く地理測量部に指令が走った。

急ごしらえの地図奪取決死隊が結成され、かおり姫たちの部屋に潜入することになった。

「あたしです。なんぞ用ですか？」

かおり姫の部屋では女装した男性の満湖が荷作りをしていた。

決死隊と名付けられても所詮は素人である。

「ルームサービスでございます。お部屋掃除に伺いました。」

「まだチェックアウトしてないんですが。」

「そのようですね。御用がございましたら、内線五番でご連絡ください。」

決死隊の地図奪取作戦は失敗した。

銀河鉄道の出発は午後二時だったが、好き勝手に行動する客たちの性分を考慮して、満鉄の屋島君は一時間前に出発と伝えておいた。

皆それぞれに奉天見物に出かけたが、日本から高僧が来たと噂が立ち、在留邦人から依頼が殺到した帰依住職は見物もできず法要のアルバイトに出かけた。

ホテルの従業員の間では奉天城大浴場の幽霊の話でもちきりになり、ただでさえ話に尾ひれがつきやすい民族性も相まって知らぬ人がいないほど広まっていた。

銀河鉄道一行がチエックアウトした後、二人の老婆が部屋の中で死んでいるのが見つかった。昨夜、特務機関の工作で仲たがいがいた挙句、毒を盛りあつて双方自滅したチバーバと小宮山であった。

附子(ブス)の語源と言われるだけあつて、フグの毒に中つて死んだものだからそれはもう二目と見られぬ醜い顔で息絶えていた。元々そういう顔だったが。

ホテル内には奉天城の幽霊の祟りと噂が立ち、そんな噂が外に流れたら営業に差し障ると考えたホテルは二人をボイラーに叩き込んで燃やしてしまった。

ショウ・チャンツーから連絡を受けた舞子売中佐が手をまわして、満鉄の搭乗者名簿からこの二人を削除しておいたので出発時の混乱はなかった。

その後、ホテルのバスルームに赤いお湯が出ると言う問題が起きたが、錆びた鋼管が原因でパイプを全部入れ替えたらすっかり治つたと言う。

さすがに勝手気ままに動き回る人たちでも十二時頃になるとぞろぞろと駅の周辺に集まつて来て早い人は搭乗を始めた。

男前家の弟君は勝手に逃げ出さないように男前のカオリさんの背中に括り付けられていたが、これはこれで「こ機嫌だつたようだ」。

大本営の一团について列車に乗り込んで行くところろん娘を機関車の影からこっそり眺める男がいた。祖谷氏敬である。視線を感じたところろん娘が振り返ると、祖谷氏敬は悪いことをしているわけではないのに、機関車の影に隠れるのであった。

今朝のショウ・チャンツーはモヒカン頭のカツラを付けていた。試しに未造技師の前を何気なく通り過ぎたが？未造技師は気が付かなかつたので、今日の変装もいけてるぞ！とラジオ体操をした。

ショウ・チャンツーはラジオ体操をしながら、奉天から銀河鉄道に乗り込もうとする客の中に怪しい人物を発見した。

「ウー・ピン！マチ姐さんとミサオちゃん！」

ショウ・チャンツーは後ろに手を回してフォーメーションのサインを出した。

ショウ・チャンツーは満州ユニセフのスタッフに変装したアグネス・チャンという八路軍の女を発見したのだった。写真入りの手配書が出回っていたが、憲兵の前を通り過ぎてはわからなほど見事に変装していた。

マチ姐さんとミサオちゃんと側面をおさえられ、振り返れば背後に赤井五平が取り囲んでいたため、アグネス・チャンは上へと飛び上がったが、その瞬間、ショウ・チャンツーは頭のモヒカンを取り外してアグネス・チャンめがけて投げつけた。

カキーンと金属音がして、モヒカンはまたショウ・チャンツーの頭へと戻ってきた。

同時に赤井五平が投げた。パイ。パンの麻雀牌が眉間にめり込んだ。

この一連の騒動を見ていたのがたまたま満州映画協会に仕事に来ていた田谷英二で、後にウルトラセブンにショウ・チャンツーのモヒカン頭が生かされることになる。

パハリハラハラ。アグネス・チャンの変装がはがれて、手配書に出ていた写真と同じ顔が現れたのだった。

「憲兵！指名手配の女だ！早く逮捕せよ！」

ショウ・チャンツウの声に駆けつけてきた憲兵にアグネス・チャンは取り押さえられた。

「違うあるよ！違うあるよ！アグネス犯人じゃないあるよ！アグネス日本人あるよ！」  
自分で犯人名を名乗っていた。その荷物からは大量の爆薬が発見された。

「変装したつもりだろうが、観音様はごまかせないぜ。」

ショウ・チャンツウは逮捕劇の最中にはぎ取ったパンティーを運転士の祖谷氏敬に渡し、

「記念にとっておきな。」

と、立ち去って行った。祖谷氏敬はアグネス・チャンのパンティーを握り締めてショウ・チャンツウの後ろ姿に見とれていた。

「師匠！よくぞあの変装を見破りましたねえ。」

赤井五平が絶賛すると、

「女は化粧ひとつで随分変わるからな。私は女を見る時に顔ではなく観音様を見ているのさ。」

マチ姐さんとミサオちゃんは慌てて股間を手で隠した。

### 〜ショウ・チャンツウの謎〜

ショウ・チャンツウは特務機関に任命され、中国人に扮して敵情報を操作するにあたって  
武術を身につけるため、青島にある少張寺(しょうちゃんじ)に入門し、社老師にその手ほど  
きを受けた。

少張寺にとつて、宗教を弾圧する社会主義を信望する八路軍は無論最大の敵であったが、  
蒋介石の国民党も不正がまかり通る好ましからぬヤカラであった。

社老師は敵国であつても誠実が期待できる日本に賭けていた。

寺院での武術訓練と言えば過酷で厳しい試練を思い浮かべるが、社老師は福利厚生を重  
んじる僧侶であつた。のちに日本にこの思想をもたらし、社会保険労務士を社老師と呼ぶ  
ようになった。

少張寺には様々な拳法の使い手がいるが、その使い手を羅漢と呼んだ。

ショウ・チャンツウが社老師から手ほどきを受けたのは少張寺裸感拳と言う奥義で、観音  
様を守る拳法であつた。

この修行によつて、ショウ・チャンツウは瞬時に敵のパンティーを脱がせてしまう技や、脱が  
さなくても観音様が見える秘伝の奥義を身に着けたのであつた。

それが世の中にどう役に立つのか？結果を求めずただただ修練を繰り返すことが修行の  
意義で、到達点などは求めてはいけけないのであると、オイゲン・ヘリゲルは「弓と禅」で語つて  
いる。

ほかの理由もあつたのだろうが、剃髪したショウ・チャンツウは少張寺を出て、大陸各地に  
工作活動をすべく出向いたのであつた。

シヨウ・チャンツーに命を救われたのは日本人ばかりではなかった。中国人の中にも、シヨウ・チャンツーに危ないところを救われた位という男がおり、この男はのちに生まれる娘にシヨウ・チャンツーの名前を借り、チャンツー・イーと言うハリウッド女優になるのであった。

風魔忍者のマチ姐さんとも飛騨忍者のミサオちゃんとも違うシヨウ・チャンツーの体術はこうして作り上げられたのであった。

シヨウ・チャンツーにパンティーをはぎ取られたアグネス・チャンは八路軍のスパイとして逮捕され、はかないままで人生を終えた。

時計は午後二時を示し、定刻通りに運転士の祖谷氏敬は列車を出発させ、乗り遅れた人もいないみたいだとほつとした。

動き出した列車を追いかけて来る男がいた。客車を追い抜き一番先頭の機関車に飛び乗ると、

「交換しよう！」

と祖谷氏敬の被っていたアグネス・チャンのパンティーと、ポケットから出した重慶のおねえちゃんの臭いパンティーを交換すると、機関車の窓に石炭を放り込み、馬車馬の如く働く秋田のネロさんだった。